

もちひと様の歴史を知ろう

高橋 実

1. はじめに

以仁王とは平安時代末期の皇族。後白河天皇の第三皇子。「以仁王の令旨」を出して源氏に平氏打倒の挙兵を促した事で知られる。邸宅が三条高倉にあったことから、三条宮、高倉宮と称された

北原家の巻物様

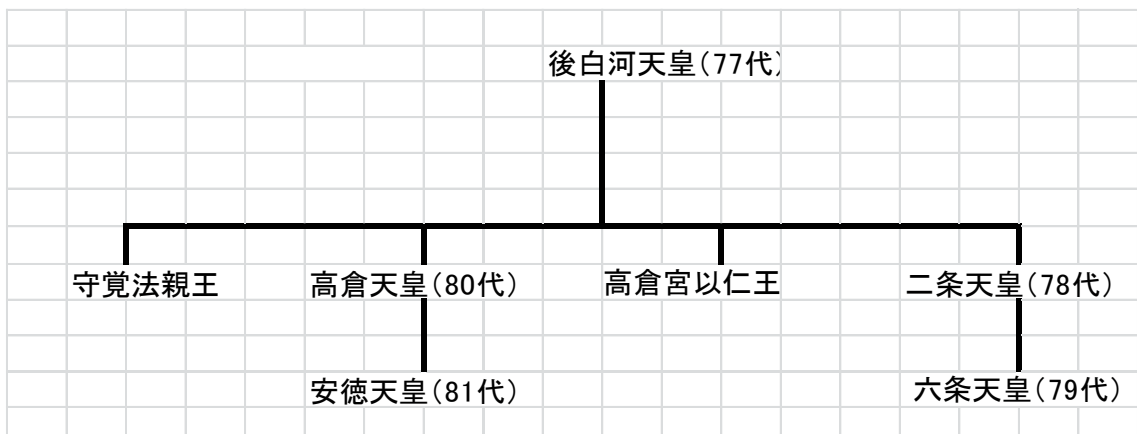
村おこしにつなげる野外劇

2. 以仁王伝説の発端

柿花灰「皇子・逃亡伝説」

3. 以仁王とは

後白河法皇第三皇子（兄の守覚法親王が仏門に入ったため第二王子といわれる）三條高倉に御所を構えていたため、高倉の宮と言われた。母は加賀大納言季成の娘。異母兄弟 兄は二条天皇、弟が高倉天皇に即位した。以仁王も一時皇位継承を取り沙汰されたが、母が摂関家の出身でなかったため、二歳の安徳天皇が即位した。親王宣下の望みは絶たれ、政治とはかかわりない日陰暮らしを送っていた。そして治承四年（1180）源頼政の勧めで平家追討の令旨を發し、兵を挙げる。平知盛らの追撃で三井寺に逃れ、興福寺に向う途中、奈良光明山で流れ矢に当たって戦死したと平家物語に語られている。その後、以仁王の首は都に入り、首実検されたが、以仁王を知る人が少なく、そのため、以仁王が生きているという風説がしばらく続いた。以仁王挙兵は失敗したが、その令旨は行き続け、諸国の源氏蜂起を促すことになった。



4. 源頼政

平安時代末期の、文武両道に秀でた武将。治承四年七十七歳にて宇治平等院にて自決。清和源氏。頼光の末裔で、兵庫頭仲政の子。若い頃は、二度の鶴退治で武名を上げ、歌人としても知られる。平家全盛時代に治承二年従三位に上る。保元の乱には、源義朝に従って後白河天皇方について崇徳院方と対戦して、勝利を収めた。その三年後の平治の乱では、清和源氏嫡流でありながら、天皇方についた。その中で勝利を収めた。その功績により、従三位に任命、翌年出家して源三位入道となる。清盛の傘下に出世してきたが、時代に清盛政権に不満を持ち始め、遂には平家打倒に立ち上がる。そのとき既に七十七歳だった。辞世の歌「埋もれ木の花咲くこともなかりしに身のなるはてぞかなしかりける」

「人知れず大内山の山守は木隠れてのみ月をみるかな」この歌で昇殿を許される。

「のぼるべきたよりなき身は木のもとに椎を拾ひて世を渡るかな」この歌で源三位となる。

5. 伝説上の以仁王

治承四年（1180）以仁王は源頼政と謀り、平家討伐の挙兵をしたが、宇治川の戦いに敗れた。身代わりを立てて逃れ、越後の小国に頼政の弟頼行を頼って行くことになる。駿河・甲斐・信濃を経て、沼田に着く。仕えた従者は尾瀬中納言藤原頼実・渡辺唱・猪俣太。片品川を遡り、檜枝岐から奥会津に入る。八十里越えを通過して越後の小国に落ち延びたという。その間、奥会津の伊南川沿いの地域では、村人からもてなしを受け、のどを潤したという御所清水、以仁王が食べたという御前柿、柳津に住む平家側の石川有光に攻められ、落雷によって助けられたため、名前を変えたという氷玉峠など、以仁王の言動による伝説が数多く伝えられている。新潟県東蒲原郡上川村中山にある墳墓が以仁王の墓であると伝えられている。

6. 小国氏

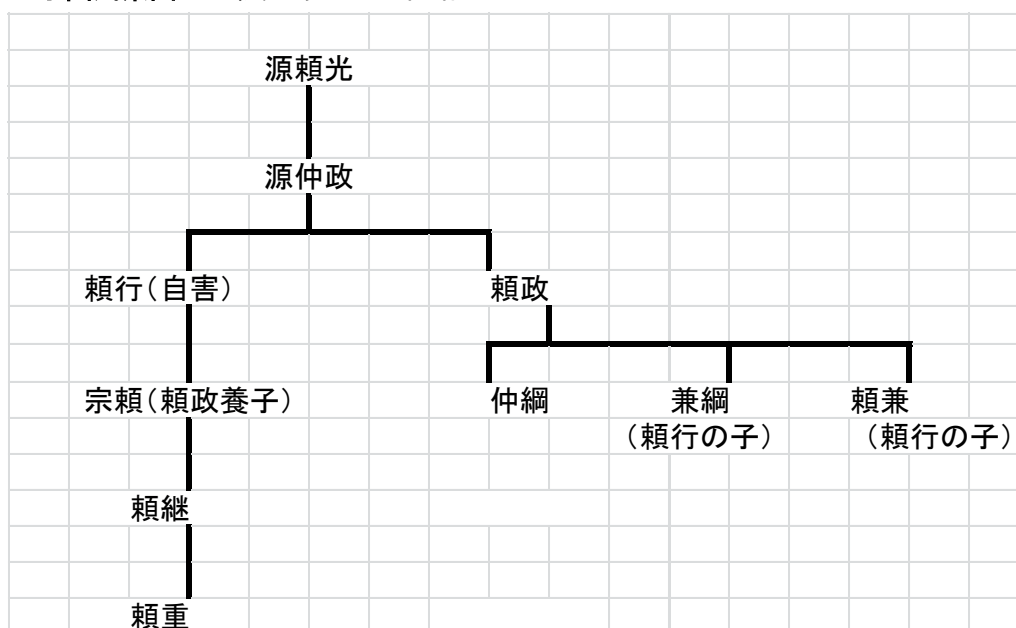
中世の頃、小国町一帯は「小国保」と称され、国衙領であった。この小国保一円を支配し、開発に努めたのは小国氏である。小国氏は清和源氏の嫡流で源頼政の弟源頼行を祖とする。長承年間（1130）小国保の受領となり、領地の地名を名字として「小国氏」を名乗った。頼行一宗頼一頼継（連）と続くが、この地に定着したのは、頼継である。源頼朝が鎌倉に幕府を開くと、頼継は有力御家人として小国保地頭に補任された。頼継は建暦二年（1210）正月、鎌倉幕府のお弓始めに射手として選ばれ、堂々第一位を獲得し、三代将軍実朝公より「天下一の精兵也」と賞賛され、一躍小国の名を全国に轟かせた。その後、蒲原地方の領地経営のため、本拠を岩室の石瀬に移したが、一族をこの地に残し、小国の開発発展に尽くした。

南北朝時代には小国政光が越後南朝軍の総帥として大活躍した。戦国時代には小国頼村・小国重頼等が上杉謙信支配下で有力家臣として重要な位置を占めていた。上杉景勝代に「大国」と改名したが、家系は、綿々と続き、現在に至っている。

7. 小川庄と小国氏

「東蒲原郡旧蹟誌」には、小国氏についてつぎのような記述がある。小川庄は、初め源満仲が領主だったが、後城氏の所領となった。治承四年以仁王は東蒲原郡東山村の中山に住んでいたが、翌養和元年（1181）会津の恵日寺の勝堪が攻め込んで以仁王は自刃、従者の渡辺唱も戦死した。小川庄には、小国氏の領地があり、まもなく起こった御館の乱で小国頼勝は戦死した。以仁王が越後に逃れる時、猪俣太の子藤五郎政清が従ってきた。頼政の妻菖蒲前を守ってきて、やがて菖蒲は頼政の子を生んだという。

8. 小国氏系図 頼光あと二代省略

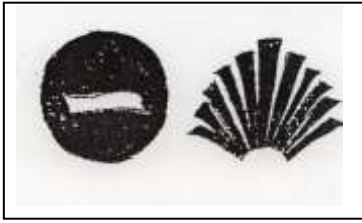


9. 北原家の巻物

原の北原家は祖先が三兄弟で北条家に仕えていたが、戦いに敗れ、越後の落ち延びてきたという。家紋は北条鱗。代々北原家の由緒を伝える巻物を伝える。毎年2月11日早暁北原家三人の家長が、女人・他族近世で巻物を押し頂き呪文を唱えつつ、祭りをとりこなう。この巻物は門外不出であった。昭和63年六月に公開。幅10寸長さ約3尺。文章は漢字カタカナ混じり文。

10. 巻物解説

三郎正成まで三代である。玉印にては、野幕の文刈田第一文字丸の内に記すものである。
一、人間に生れはじめる次第は、中天竺マガタ国の大王が急に思し召し立て、御代を打ち捨て、仏法に帰依し、後生・菩提を弔おうと思し召しなされて、内裏にお住まいする。車



にお乗りになって、御后・皇子を伴い、御虚空をさして飛び、この車の落ち着く処に、神とも仏とも、顛れなさるべし。と御飛びなさる間に 3000 人の公卿殿上人皆雲や霞に乗ってお供なさった。日本国紀伊の国、牟婁郡音無川の麓に落ち着きなさった。天皇様は熊野権現、皇子

若宮様・御后様は滝本如意輪観音となった姿を現しなさった。熊野三所権現がこれである。三千余人のお供は、憧れ日本へ流れ着く者もあり、また山中に住まいするものもある。吾らの先祖は、宮井山田の中へ落ち着き、稲の上に座る間に、王院来たり、奉公仲間は、刈田を幕の紋にするものもあつた。絵図に印をお書きになった。

- 一、王院奉公申すには、幕の紋はこのようである。後若宮これを立て、鈴木権守と兄弟となり、誓いの文を書くことになった。宮井子息カン丸、源平の争いの節、源氏の大將、頼家内裏より名字を替えた。これも本文に由緒を書いてある。北原二郎となつてこの名字が始まつた。これ以前に日本にわが名字はなく、大名書きを見物の上、見るのがよい、源氏の家に移つてからの幕の紋が変わつた。内裏での三代の系図は、信介一カン介一言守宮井

一、鎌倉に移つてから幕の紋、上り蝶小紋に三つ星を書いてある。



一、鎌倉にて宮井より六代の系図を記しておく。北原源正共一藤三一又六—源三一弥三衛門尉一同弥三衛門尉一六代系図はこのようである。

一新田へ分れ次第、六代目弥三衛門尉、子供二男藤九郎新田よりこの国の藤原へ移り、越後の国に下つてきた理由は上河下河が鎌倉領だつた時に移つてきた。

- 二、越後下河に三代住まいするとき、只今、国方へ所領国に留まる間、内裏での証文、鎌倉にての証文二通を一通に仕立て、当国にての始まりを加えて三通を一通に書き記すものである。

永和元年乙卯八月十五日

下河にて某まで三代の系図 北原藤九郎源正共一藤九郎一源六郎

- 一、すべてわれわれ名字の始まる場所は、二カ所はなく、ことに総領のないという人がいたならば、この謄本を見せるべきである。日本に本文が二通あるはずがない。後々のことは書物方あるといつても、本文の文言は越後ばかりである。よくよく心得ておくべきである。永和元年の書物、明德二年書き記すものを応永二年乙井石動山に書き写す三十五通の中である。三河の守 正共 松丸殿

11. 柿花仄「皇子・逃亡伝説」

世の無常を感じた以仁王は、熊野の音無川のほとりで、仏に仕える決心された。そこで新しい家紋をつくられた。北原家の巻物と高橋家の巻物の類似性から北原家は以仁王の子

孫、高橋家は頼政の子孫と推定する。

渡辺三省氏「越後歴史考」には、各地の先祖由来書きに共通点があるといって、次のように説明する。

イ、わが家の先祖は天竺国の〇〇天王である。

ロ、その末裔が日本の紀の国熊野に下った。

ハ、〇〇殿にしたがって越後に入り、上河・下河に住した。

ニ、頼朝の富士の巻狩りに参加した。

ホ、幕の紋について詳しく図解する

へ、本書を頭に戴けば七難即滅・七福即生する

ト、本書は応永二年に能登の国石動山の神前で記して各庶家に与えるものだ。

以上のような事柄がこのような順序に従って書かれている。いずれも我等の名字は知行地の名を取ったもので、日本に二ヶ所とあるべからざるもので、よってこの名字を名乗るものは、われら一族だと言うことを強調し、団結を促すものになったとする。どの文も一族以外の披見を禁じ、中にはその家の主人が一代に一度だけ拝見して後代に伝えよ、という厳重な規制を伴うものだった。

北原家・高橋家の巻物もこの部類に入るものに違いない。